

埼玉育ちのグローバル人

山あり谷あり、自分と向き合う海外生活

第1回 「世界に門戸を開いた高校時代」



埼玉県マスコット「コバトン」

平成30年度「埼玉発世界行き」奨学生

鶴山 えりかさん



はじめまして。埼玉生まれ埼玉育ち、鶴山えりかと申します。2014年にインドで海外生活をスタートし、米国留学を経て現在は東ティモールというアジアの国で、国連機関の一員として政府の政策作りなどに携わっています。

「埼玉育ちのグローバル人」がテーマということで、私が海外に興味を持ったきっかけや、海外との関わり方などについて、お話したいと思います。今回は、私が「海外」という扉を開くきっかけとなった高校時代のお話をしたいと思います。



ナーランダ大学遺跡にて

高校受験は、英語を極めたいという思いから早い段階で志望校を一枚に絞っていました。小学校2年生の時に両親に頼んで英語教室へ通い始め、それ

からというもの英語が得意科目となり、自分の強みをさらに伸ばすために和光国際高校の外国語科を選択しました。先生方はどなたも英語堪能。時には英語だけで授業をこなし、日本人離れの発音で外国人の講師達とスラスラと会話をする教師陣は、とてもかけ離れた存在に思えました。

今でも印象に残っている授業は時事英語。日本語での説明文などは一切ない教科書を使い、世界が直面する問題について英語で学び、発表し、時にはディベートをしました。トピックは難民問題をはじめ、地球温暖化、世界の貧困などです。この授業が国際開発、国際協力といった概念との出会いでした。

また、この授業を通じて国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) で日本人として初めてトップを務めた緒方貞子さんの存在を知りました。これがきっかけで自分も国際機関で難民支援など国際開発に携わりたいと考えるようになり、国際機関という大舞台を目指すことになりました。それからは、国連が年に一度開催する難民映画祭に足を運んだり、緒方さんが出演される講演会を聞きに行ったりしました。大学時代に大学設立 100 周年を記念した講演会に緒方さんが登壇され、私は緒方さんの半生を綴った本を片手に臨みました。サインをもらおうと講演後に出待ちをしましたが、小心者の私は、彼女がすぐそばを通り過ぎるのを見守るばかりで言葉を交わすことすらできませんでした。昨

年お亡くなりなり、憧れの存在を失ったと知った時は非常にショックでしたが、あの時の思い出が今でもやる気を奮い立たせてくれるような気がします。

高校時代に話を戻しますと、海外に初めて行ったのもこの頃で、校内のプログラムを通じてオーストラリアとフランスでそれぞれ2週間ホームステイをしました。当時、高校が授業を提供していた第二外国語4つの中から、国際機関でよく使用されている言語ということもあってフランス語を選択し、学んでいました。後にモチベーションは、「フランス語話者になって元フランス植民地だったアフリカ諸国で国際開発に携わりたい」に変わり、大学ではフランス語を継続して学びながら国際法や平和構築などを受講し、国際開発への意欲を高めつつありました。自分のリサーチ不足もあり卒業後すぐに国際機関就職とはいかず、アフリカ行きへの思いも未だ叶っていませんが、大学卒業から数年後、インド行きのチャンスが巡ってきました。



デリーのマーケット

今回はインドでの駐在生活について綴りたいと思います。